

## 町長コラム オール佐久穂のまちづくり

### 「失われたものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」

第15回人権フェスティバル in 佐久穂が、2月2日に茂来館で開催されました。小中学生の人権作文発表（小6年の小須田歩さん・中学7年の道木菜摘さん）、合唱や寸劇、そして2000年シドニーパラリンピック車椅子バスケットボール日本代表のキャプテンであった根木慎志（ねぎしんじ）さんによる講演会がありました。

根木氏は車椅子で舞台上を自由に動きながら、「パラリンピックの父」と言われるルートヴィヒ・グットマン博士の理念「失われたものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」という話題でお話がありました。

駅の点字ブロックに物が置いてあったために、盲目の人が先に進めなくなったりとしたら、誰が悪いの？・盲目の人が悪いの？・物を置いた人が悪いの？・それを見ている周りの人が悪いの？・「かわいそうだね」だけ？・障害のある方一人ひとりが、具体的にどんな困難に直面しているのかということに注目し、必要な配慮（合理的配慮）を考えていくことが、当然の社会ではないですか。障害をつくっているのは、行政や社会ではないでしょうか？

私が初めて「合理的配慮」という言葉を知ったのは、もう10年位前のことになります。当町の手をつなぐ育成会（知的障がい者とその家族を支援する団体）の会長さんからでした。

「障害のある人に必要な配慮を、出来るのにやらないことは、行政の怠慢であり、差別とも言えます。もっと勉強してください。例えば、小学校の授業参観日に、車椅子でないと移動できない保護者が居る場合、以前の日本では、その保護者が階段の昇降を支援する人を自分で探し、手配するのが当たり前でした。これからは、前もってそのことがわかっていけば、学校側で支援者を用意しなければならぬ。」とのことでした。

あの時、会長は、「障がいがある人が悪いのでは無い。」と言いたかったのだと思います。人には、一人ひとり違った個性があります。移動が困難、読み書きが苦手、疲労や緊張し易い、複雑な指示が理解困難等々の生きづらいう状況に注目して、必要な配慮を考えていくことが大切です。その一方で「得意なこと・強み」に視点を向け、その人らしく輝ける社会にしていくべきだとも思います。

「失われたものを・・・」という言葉は、障がい者に限らず多くの人に響く言葉です。また、様々な人へ成長させる言葉でもあり、組織づくりや町づくりにも通じる言葉だと思います。

詩人の金子みすゞさんの一節「鈴と、小鳥と、それかわらわしたし。みんなちがって、みんないい」を思いました。

